

近代文書にみる竜山石

今回調査している文書は、高砂市が所蔵する曾根町の「河野家文書」で、六千二百十五点に及び、その内の約三分の二を石材関係の文書群が占めています。

私達の町に残る文書を通じて、竜山石産業のひとつまをのぞいてみましょう。

江戸時代の河野家は、主に塩田を経営していました。福本藩(現神戸河町)と幕府領との入り組み支配にあった曾根村の庄屋も代々つとめてきました。

明治になって当主の河野岩吉氏は、代議士など政治家として活躍し、塩田経営の他さまざまな事業を展開しました。竜山石の販売事業もそのひとつです。

文書の大半は明治・大正期のもので、岩吉氏の時代が背景になっており、大きく生産、流通、販売の三つに分けることができます。

江戸時代の竜山石は姫路藩の専売品で、石切場は藩

が領有していましたが、明治維新になって民間に貸し下げ(後に払い下げ)となり、各々の山方は採石・販売が自由営業となりました。竜山石を印南郡の重要物産として位置付け、石材業者達は同業者組合を設立し製品規格や値段の統一など取引の安定化を申し合わせ

文化財総合的把握モデル事業

ひと・まち・石

問合先 教育委員会
生涯学習課文化財係
☎448-8255

ました。一方、河野家は丁場での採石は行わず、生産者から仲買して、供給地へ販売する石問屋を経営しました。

文書によると、当時の流通はほとんどが船便で、伊保港に石材置き場と取扱事務所、兵庫と大阪には支店

を置き、これらを拠点にして阪神間はもちろん、和歌山、京都、名古屋方面にも販路は拡大していったようです。

竜山石は建築用材として販売し、近代工場建築ののべ石などに多用され、活況を呈した時期もありましたが、御影石との競合、価格競争、セメントなどの新用材に押されていきました。

当時は、今のように電話ではなく、はがきや封書で連絡をとりあっていました。紙面には、当時の人々のやりとりの様子が今もそのまま息づいていて、臨場感があります。これらの文書群は、近現代の竜山石を知るうえでの貴重な資料といえるでしょう。

(高砂・古文書の会

歌井 昭夫)



河野家文書